

シエリダン・ギリ、ウイリアム・J・シールズ編／指 昭博・並河葉子監訳

『イギリス宗教史』

——前ローマ時代から現代まで——

法政大学出版社 二〇一四・一〇刊
A5 七〇二頁 九八〇〇円

極めて浩瀚な書物である。序論と全四部、二六章から成り、英語の原書でも六〇〇頁を超える。全部の章のタイトルと執筆者を掲げるだけでも、新刊紹介としての紙幅をほぼ使い果たすことになるであろう。何故このような大部の書物となったのか。それは一言で言えば、「イギリス」の「宗教」が含意する事がらが、近年急速に広がったことに起因すると考えられる。

まず「イギリス」について。今さら繰り返すまでもないが、近年の「イギリス史」はブリテン国家の複合性を抜きにしては語り得ない。本書も、ウェールズ(五章)とスコットランド(六章・七章)を個別に扱った章と、特に両者に言及した章(二・三章・一九章)を周到に配置している。

ただし、序章でも述べられている通り、本書の対象は「グレート・ブリテン島」であって、「ブリテン諸島」ではない。すなわち、アイルランドについては正面から取りあげられていない。アイルランドに固有の宗教史を組み入れるためには、さらに膨大な紙幅を必要とするという理由が考えられるが、逆にアイルランドを抜

きにしては、説明が困難になる部分もあったのではないか。事実、一八世紀末以降のローマ・カトリック教会について論じた一八章では、アイルランドのカトリックや、アイルランド移民についてかなりの紙幅を割いているし、その他の章でもカトリックとの関連でアイルランドの状況に触れている部分が多い。

第二に「宗教」について。訳者あとがきにも述べられている通り、「宗教史」を名乗る本書が対象とするのはキリスト教に限らない。我が国で長らく参照されてきた類書として、浜林正夫氏の同名の書物がある(『イギリス宗教史』大月書店、一九八七年)。浜林氏も同じようにキリスト教に限定されない「宗教史」を指向したために、キリスト教流入以前のケルト人の宗教についての記述がある点は共通しているが、浜林氏が一九世紀末までしか扱わなかったこともあって、本書が扱う「宗教」の幅ははるかに広い。すなわち、主に現代を扱った第四部には、ユダヤ人を個別に扱った二二章が配置され、宗教の多元性について述べた二五章では、キリスト教系の新興宗教、さらにはイスラム教、シーク教、ヒンドゥー教、仏教までもがイギリスの宗教として論じられる。

それ以前の時代についても、叙述は豊かである。宗教改革以降、少数派に転じつつも常にイギリス史において様々な意味で重く存在であったローマ・カトリック教会については、二人の編著者が自ら担当して二章を設けている(二・三章・一八章)、理性と宗教の関係(二・一三章)、世俗化の問題(二・二六章)といったことからにも個別の章があげられている。また、世界規模に拡大したイギリス帝国における各教派の宣教団体による活動の問題にも目配りを

忘れない(二〇章)。

なお、本書の全二六章は二名の編者がそれぞれ二つの章を担当している他は、全てその分野の専門家が一章ずつ担当しているため(その点が本書の専門性の高さをも担保している)、そもそも章によって多少の違いはあるが、翻訳はおおむね読みやすい。ただし、浩瀚であるがゆえに、わずかに日本語表記の不統一もみられる。聖アンドリュー(五五頁)と聖アンドルー(一三五頁)、ドミニコ会(七六頁など)とドメニコ修道会(三〇六頁)、provinceの訳語としての大司教区(六〇頁、八五頁など)と大司教(の)管区(五頁)など。最後の点については、本書だけの問題ではなく、archdioceseとの訳し分けの関係で、広く我が国学界での訳語統一が求められるであろう。

以上紹介してきた本書は、情報量の点からも、テーマの網羅性の点からも、今後長くこの分野で参照される基本文献となることは間違いないであろう。

(山本信太郎)